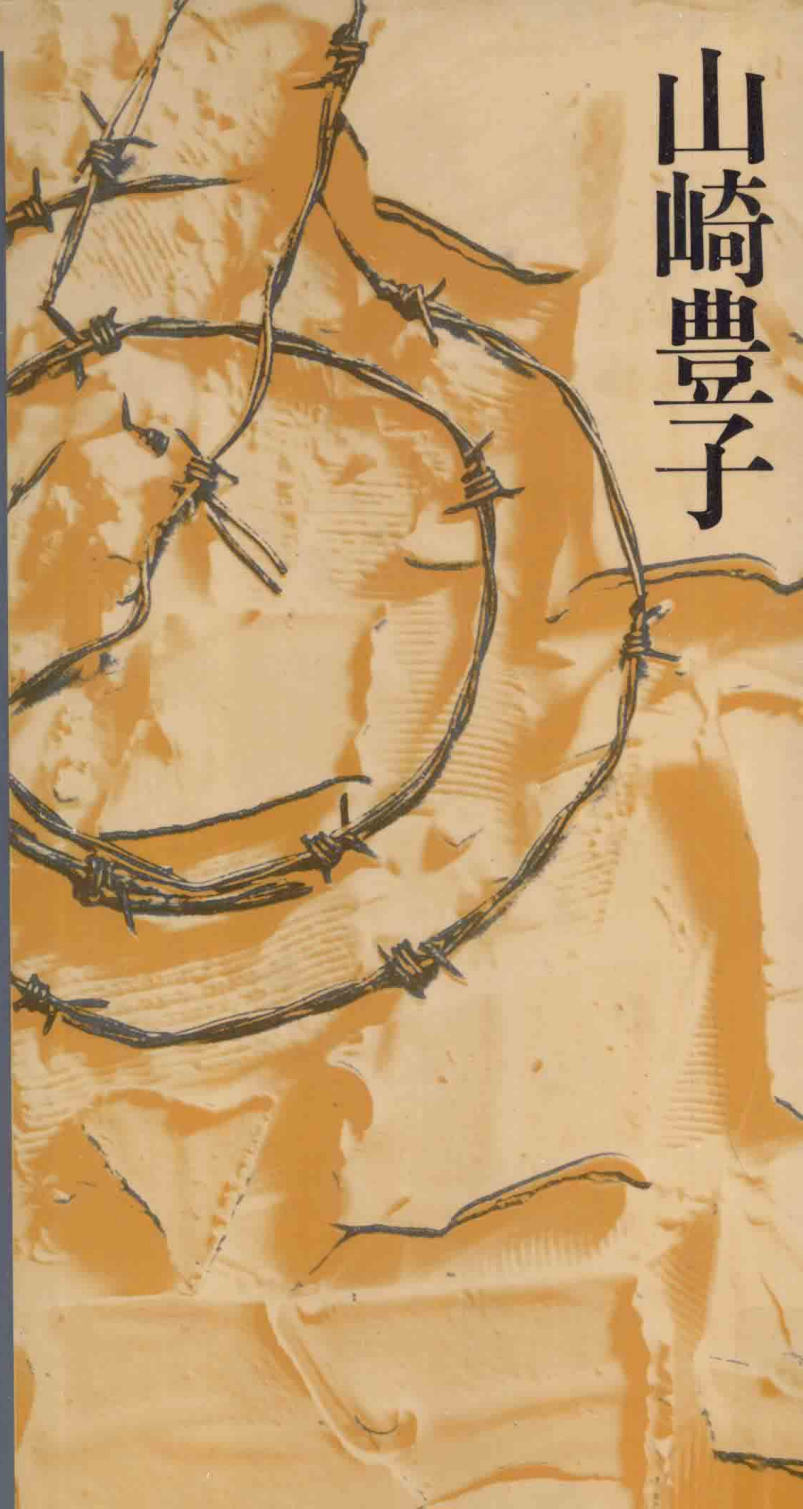


山崎豊子

二つの祖国

上



新潮社版

山崎豊子

二つの祖国
上



ふた
二つの祖国^{そごく}

昭和五十八年七月二十日 発行
昭和五十九年二月二十日 十三刷

定価 一一〇〇円

著者 山崎 豊子^{やまざき とよこ}

発行者 佐藤 亮一^{さとう りょういち}

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 (業務部)〇三二六六五一一
(編集部)〇三二六六五四一一
振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

© 1983 Toyoko Yamasaki Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-322810-5 C0093

二つの祖国(上)・目次

一章	ジャップ……………	7
二章	強制キャンプ……………	45
三章	砂嵐……………	76
四章	ニセイ……………	120

五章 人間テスト……………168

六章 USアーミー……………214

七章 血の証し……………256

八章 太平洋……………281

装
幀

司

修

二つの祖国
(上)

太平洋戦争は、数多くの哀しみと愛のドラマを生んだ。この作品は、当時の歴史的事実をもとに、小説的に構成したものである。登場する作中の主人公とその家族、友人などは架空の人物である。

一章 ジャップ

アリゾナ砂漠は、太陽と砂だけが生きていた。

不気味なほど濃いブルーの空の下に、延々と続く砂漠は渴ききり、地面にしがみつくように生えているセイジ・ブラシやアイアン・ツリーの灌木も、緑の色を失って枯れかけている。

灼熱の太陽に灼かれた砂が、灌木の間を音もなく風の方
向に移動し、風紋を描いていく。風は僅かにしか吹いていないが、セイジ・ブラシ一本生えていない、一マイルほど先の赤い砂漠では、濛々たる砂煙がたっている。すべてが死に絶えたような荒寥たるアリゾナ砂漠——、鳥さえ生きられそうにない苛烈なその砂漠の一点に異様な光景があった。

有刺鉄線をめぐらせ、監視塔で見張った鉄条網の中に、一糸まとわぬ裸の人間の列がならび、武装した米兵たちが銃口を向けている。アリゾナ州からニューメキシコ州の州境に続く砂漠の中の軍キャンプであった。一九四一年十二月七日の真珠湾攻撃の日から、敵国人として逮捕され、収

容された日系民間人たちの裸体の列であった。

「ヘイ ジャップ！ 動くな」

兵隊たちは、三、四十人ずつ、五列にならんだ裸の列に銃を向けて、怒鳴った。華氏百十度（摂氏四十三度）の炎天下の砂漠に、素っ裸のまま、たたさされている日本人たちは、汗も涸れ、背中は火ぶくれになりかけていた。

それは、たった一本のスプーンから起った出来ごとであった。

キャンプ内ではナイフ、鋏、剃刀はもちろん、釘一本も所持することを厳禁していたが、十日前、手先の器用な者数名が食料品箱の鋼の締め金でナイフを作っているのが発見され、全員ハード・レーバー（重労働）を課せられた。以後、食事のナイフ、フォークはもちろんのこと、スプーンまで、研げば凶器になるとして点検が厳重になり、昼食が終った直後、炊事係の兵隊が、スプーン一本紛失していることに気付いて、騒ぎ出したのだった。

直ちに銃を持った数十名の兵隊が四棟のバラックに押入り、全員を一列にならばせ、ベッドのマットレスから、床板まで剥がして搜索し、さらに背中にPW（戦時捕虜）と白ペンキで記した作業衣を脱がせ、ポケットをはいたり、縫目を破って所持品検査をした。それでも見つからないため、なお徹底的に調べ直そうと、全員を素っ裸にして、百度を超える戸外に整列させたのだった。

じりじりと灼かれた砂漠の上で、一滴の水も与えられず、

既に三十分も炎天に曝^{さら}されている日本人たちは、干^ひ乾^ちびた案山子^{かかし}のように見えた。

百七十名の収容者たちの中で、最年少である二十九歳の天羽賢治は、一メートル八十センチの筋肉質のひき締った体に、先刻まで玉のような汗を滴らせていたが、今は発汗が止まり、体力を失いつつあった。それでも彼は六十歳以上の高齢者たちの身を按^{おさ}じ、濃い眉に迫った鬚^{ひげ}のある眼^めざしで氣遣^{きづか}うように高齢者を見守っていた。

みすばらしい裸姿^{はだか}であつたが、皆それぞれロサンゼルス、サンフランシスコの日本人会、各県人会の会長、副会長をはじめ、南加在郷軍友会、武徳会の役員、仏教開教師、日本語学校校長など、カリフォルニアの日本人社会の世話役であり、指導的立場にある人たちが殆^{たいてい}んどであつた。日本の真珠湾攻撃のその日から、敵国人として続々と逮捕され、FBI監獄經由でこの軍キャンプへ送り込まれたのである。百七十名の中には、神経痛や高血圧で臥^ふっているところを連行された者もあり、特にロサンゼルス日本人会会長の清水一平は、最年長者の七十三歳であつた。

「清水さん、大丈夫ですか」

「なに、若い時、荒地で鍛えた体じゃ、他の者の方が弱^{よわ}つとるじゃろ」

天羽賢治は長身の体を伸ばして、列を見渡した。意識が朦朧^{もうろう}として来たのか、ところどころ列が乱れ、ゆらゆらと体を揺がせている者もある。

さつきまでのあるかなきかの砂漠を渡る風が、俄^{突然}かにべつとり湿気を含んだ風に変わり、肺の中まで蒸せ上るようだった。これ以上、たつておれば、日射病で死亡する者も出かねないと懸念した時、

「もう駄目だ、目眩^{めまい}が……」

賢治の前列の老人が、前へよろめいたかと思うと、その場にうつ伏した。賢治はすぐ抱き起し、列の外へ出ようとした。

「ホールト（止まれ）！　へい！　ジャップ、どこへ行^いく！」

兵隊が、銃を構えて制止した。

「日射病だ！　すぐ手当てをしてくれ」

「先にスプーンを隠した場所を云え、そうしたらすぐ担架で運んでやる」

「そんなものは誰も隠^{かく}っていない、全員を早くバラツクへ入れろ！　死んでしまふぞ！」

もはや体力の限界に來ていた日本人たちは、その間にも五、六人がばたばたと倒れた。

賢治は、監視塔を見上げた。有刺鉄線に沿って設けられている監視塔からは機関銃が向けられ、裸の列がばたばたと倒れて行つても、中止の命令も出さない。賢治の眼に、怒りが沸^わつた。

一体、この軍キャンプに敵国人として収容されている日本人たちが、何をしたいというのだろうか、移民としてアメ

リカへ来て以来、荒れ果てた不毛の地を営々と四十年、五十年^{なせ}耕^かして、沃^{よく}地に變え、働き詰めに働いて来た善良な市民ばかりではないか。たまたま、日本人の親睦団体や県人会の世話役や長老であつたというだけで、敵性外国人として逮捕されているのだ。賢治自身に至つては、アメリカに生れ、アメリカ合衆国の国籍を持つ日系二世であるにもかかわらず、邦字新聞の記者だということで逮捕され、軍キャンプにまで収容されたのである。だが、同じ敵性外国人の立場にあるドイツ系、イタリア系移民は、戦時捕虜として捕えられることを免れている。これがアメリカの正義と民主主義であり、人道というもののなか——。

天羽賢治の胸に、不条理を許さぬ怒りがつき上げ、この残忍な行為をやめさせなければならぬという念^{おも}いがこみあげてきた。だが、銃を向けた兵隊にもし反抗すれば——。自分の釈放を待ちわびている、はじめての子供を妊^こつている妻と、^{とと}齡^{とと}老いた両親、まだハイスクールの学生の弟妹を思うと、決断しかねた。

ロサンゼルス日本人会会長の清水一平の膝^{ひざ}が、がくりと砂地に崩れた。賢治を躊躇^{ためら}わせていたものが、砕け散つた。この百七十名の中で、唯一人、アメリカ国籍を持つ自分がないならぬことだった。天羽は、隊列から離れた。

「ホールト（止まれ）、ホールト！」

兵隊たちが銃で制したが、賢治は、前方中央にたつて睨^{にら}みをきかしている軍曹に向つた。

バーン！

銃口が火を噴いた。昂奮した兵隊が威嚇発砲した。賢治は危うく、つんのめりそうになった。恐怖で体が硬^{こも}ばり、胸が早鐘のように打ち、怯^ひみそうになる足を一步、一步、軍曹に近付けた。

賢治が最前列まで進んだ時、軍曹はガムをベツと吐き出し、金色の毛が密生している太い腕に銃を構えた。

「天羽、危い、止まれ！」

後方で、幾人かの声が叫んだが、もはや賢治の足は止まらなかった。その眼には、自分に照準が合わされ、いつ火を噴くか知れない銃口が、熱い大気の中で、ゆらゆらと上下に揺れて見えるだけだった。

軍曹の手前^{てまえ}、五メートルほどで、賢治は足を止めた。冷酷な青い眼と視線が合った。

「射つな！ アイム アメリカカン」

賢治が叫んだ途端、軍曹の青い眼が瞬^{また}き、銃がおろされた。

「その黄色い面^{めん}をして、今、何と云つた？」

「私はアメリカ国籍を持つ日系アメリカ人だ！」

「お前のどこが、俺たちと同じアメリカ人だ、聞かせて貰おう」

皮膚の黄色い体をせせら笑うように、云つた。

「両親は日本人だが、私はアメリカで生れ、アメリカの国籍を持っている日系二世だ」

「なるほど、ニセイか、だが漂白剤でも使つて、白くならない限り、ジャップはジャップだぜ」

軍曹が吐き捨てるように云うと、左右にたっていた兵隊たちも、齒をみせて、嘲笑した。賢治の顔は屈辱に歪んだが、

「云うことはそれだけか、倒れた者を一刻も早くバラックへ入れろ、もし死亡者が出れば、私はアメリカ市民として軍曹を告発する！」

怒りをもって、云い放った。

「なに、告発？ お前が何を告発するというのだ」

「ジュネーヴ協定では、いかなる戦時捕虜も虐待してはならないと、規定されているはずだ、明らかに国際法違反だ！」

「黙れ！ 国際法違反はジャップの方だ、パールハーバー・アタックこそ、裏切りの騙し討ちだ、この狼どもが！」

真珠湾攻撃で二人の肉親を失ったという軍曹は、憎悪と復讐心を燃え上らせていた。

「それは国家間の軍事行動ではないか。非戦闘員の捕虜に對して、たった一本のスプーンの紛失で、百度を超える炎天下に素っ裸で立たせるのは、ジュネーヴ協定に違反する虐待だ」

「所持禁止の規則を破ったお前たちが悪いのだ、お前は米軍に反抗するののか」

軍曹は、銃の引金に手をかけた。賢治の体に冷たいものが奔った。今度こそ、射殺されるかもしれないという恐怖で全身が凍んだ。

「軍曹、雷が来ます！」

兵隊の一人が、上空を指した。空の一点に黒い雲のかたまりが忽然と現われたかと思うと、またたく間に青空を掩い、雷鳴が轟いた。

砂漠の様相は一転した。突風で砂塵が舞い、地面にしがみつくように生えていたセイジ・ブラシが根こそぎ吹き上げられ、宙をくるくると、飛ばされて行く。

「雷だ！ 全員退避！」

軍曹が笛を鳴らし、退避を命じた。兵隊たちは一目散に兵営目ざして走り去り、一方、賢治たち裸の百七十名もバラックへ避難した。

砂漠の雷は凄じい。大粒の雨とともに、幾筋もの稲妻が黒い空にスパークするように奔り、地上のあらゆるものをうち砕くような大音響を發した。

間近に近づいた雷が、砂漠に火柱をたてて落下した。耳を聳するばかりの雷鳴が終る間もなく、すぐまた六、七本の火柱が、そここに一時にたつ。生きた心地のしない光と音響の狂乱であつた。

賢治は、今にもバラックの屋根を突き破りそんな豪雨と、凄じい雷の音を聞きながら、曾て体験した雷雨の日の惨めな事件を思い返した。

それはカリフォルニアの暑い夏の日のことであつた。ロサンゼルス市立大学を卒業した天羽賢治は、就職口を探していたが、日系二世には、農場で働くか、フルーツスタンドでオレンジを売るぐらいの仕事しかなかった。その日、サンディエゴに行けば倉庫会社のブックキーパーの仕事口があると聞き、バスに乗って出かけた。バスを降りて歩き出した時、急に大雨が降り出した。

近くに小さなレストランの看板が見え、賢治は急いで飛び込んだが、雨はますます激しさを増し、雷が鳴り出した。ちようどランチタイムだったから、雨宿りしながら、昼食をすすめることにしたが、一向に注文を取りに来ない。あとから入って来た白人客の注文を先に取るので、催促すると、忙しいと答えるのみだった。賢治は、カウンターの中间にあるマスターに近寄り、クレームをつけた。ボクサーのような大男のマスターは、いきなり賢治の肩をぐいと掴み、カウンターの横の貼紙の前に立たせた。

「犬とジャップは立入り禁止」と書いた下に、尻尾を垂れた犬と、つり目で出っ歯の日本人の顔が向い合っている。

賢治は、耐えていたものが噴き出、男の胸ぐらを掴んだ。男は負けずに賢治の衿がみを掴み、ずるずると出入口の方へひきずって、どしゃ降りの外へ放り出した。賢治は、泥まみれになりながら、男の背中にむしゃぶりついたが、「イエロー・ジャップ奴!」と云うなり、思いきり向う脛

を蹴られた。ぬかるみの中へぶつ倒れたまま、強烈な痛みでたち上れず、這いつくばってしまった賢治の頭上に、雷が鳴り、稲妻が走った。ずぶ濡れになりながら、やっとの思いでたち上りかけた時、「キャンン!」という犬の鳴き声がした。眼を上げると、レストランの軒下に白人たちがならんで、雨と泥にまみれた賢治を見物している。その中から再び「キャンン! キャン、キャンン!」と負犬のみじめたらしい鳴声^{なう}がした。若い母親の傘の下で、そばかすの子供が犬の鳴き真似^{まね}をしているのだった。齡端^{おきな}のいかない子供であることが、賢治の心を切り裂いた。掴みかかって行くことも出来ず、足をひきずって、その場からたち去りかけると、図に乗った子供は、さらに残忍に負犬の鳴声を真似し続けた。若い母親は子供の腕をひっぱり、制止しながらも薄笑いし、周囲の大人たちも、哄笑を浴びせた。その笑いは、同じ皮膚の色のアメリカ人には、どんなことがあっても向けない性質の笑いであった。賢治の胸に、教育など二世にとって何の役にたつのか、自らの屈辱と苦悩を深めるだけではないかという思いが残った。

通り過ぎて行つた雷の音がまだ遠くで響いていたが、雨も止み、空はからりと晴れ上った。太陽は前にもまして強烈に、雨を吸い込んだ砂漠を照らしはじめたが、風は涼しかった。

再び点呼の笛が鳴り、百七十名が外に出ると、兵隊が、

「スプーンは、キッチン砂糖壺の中に埋っていた、以後、食事の前後のナイフ、フォーク、スプーンの数ははつきり解るように返却しろ！」

砂糖のついたスプーンを、ヤンキーらしく、あつけらさんと示した。

天羽賢治の眼に涙が滲んだ。誰かの不注意で砂糖壺の中に埋った一本のスプーンが、移民して以来、働き詰めに働いて来た人々を、裸の整列にまで追い込んだのだった。それは彼らが口にする敵性外国人であるというだけでは説明のつかない人種差別であつた。

「天羽君——」

背後から呼ぶ声がした。振り返ると、炎天下の整列で最後に倒れた清水一平であつた。

「ああ、清水さん、おかげんはいかがです」

「思わぬ雷のおかげで、息を吹き返したよ、インペリアル・バレーやフレスノの畑で監督に鞭打たれて働いておつた頃に比べると、商売に転じてから、めつきり体がなまつたようだ」

今ではロサンゼルス日本人街、リトル・トーキョーで、手広く雑貨商を営んでいる清水は、七十三歳とは思えぬ氣力で笑いとばし、

「それよりさつきは、よくやってくれた、丸裸にされて、米兵どもの云うがままになつていたら、奴らのジャップ扱いはこの先、どこまでエスカレートするか知れん、あれで

われわれ日本人の面目は大いに保たれた、礼を云うよ」

「とんでもありませんよ、どうせ抗議するなら、もつと早く切り出すべきでした」

「いや、銃を向けられていながら、勇敢によくやってくれた、君の今日の行動は、加州新報の論説欄に、『日本人よ、誇りを持って』と、本国の日本人にも書けないような文章で、カリフォルニアの同胞に訴え続けて来た記者スピリットの具現だよ」

淡々とした口調で云うと、PWの背文字のあるダブダブの作業衣姿で行きすぎて行つた。

そのうしろ姿には、明治生れの一世らしい忍耐と氣骨が貼りついていてた。賢治は今さらのように自分たち二世は、こうした一世の苦闘の礎の上にたつてゐることを実感した。バラックに戻りかけ、賢治はふと、メイ・ゲートのポールをふり仰いだ。雨に洗われた星条旗が、まっ青な空に翻翻とはためいている。それは、賢治がアメリカ合衆国に生れたその日から、自由と平等と正義を約束したシンボルであり、小学校へ入つてからは、毎朝、右手を左胸に当て、国家への忠誠を誓つて来た国旗であつた。

その星条旗の下で、先刻、あつたことを考えると、賢治の胸の底に、複雑に揺れ動くものがあつた。

そして、賢治自身が逮捕されるに至つた日のことが思い返された。ロサンゼルス日本人に向けて発刊されている邦字紙、加州新報の記者であつた天羽賢治が逮捕されたの

は、パールハーバー攻撃直後、一世の日本女性がFBIに連行され、監獄で自殺した記事を書いたためであった。

*

その日、天羽賢治は、廻りはじめた輪転機の前で、刷り上ったばかりの新聞を抜き取り、指にインクがつかないように紙面を開いた。

大野なみ夫人 獄内で縊死

加州樓主大野保氏夫人なみさん(五)は去る水曜日、連邦検察局に検挙され、リンコロン・ハイト警察署に留置中のところ、今朝五階の洗面室において、ストッキングで縊死しているのを発見された。英字紙では、日本の戦時公債を三千ドル着物に縫い込んでいたと報じているが、日本の戦時公債なるものが米国においてあるはずがなく、大野さんが「海軍おばさん」と親しまれ、日本海軍がロサンゼルス港に入港する度に、日本食、茶菓の接待などしていたところから、当局に何らかのスパイ容疑をかけられ、縊首に至ったものではないかと思われる。

賢治自身が、書いた記事であった。

賢治の濃い眉と、すぐ下に迫った静かな眼に、かなしげ

な翳が浮んだ。日米開戦を境に、暗く思い沈むことの多い賢治であった。

僅か十六行ほどの簡単な記事であったが、開戦のその夜、社長の松井が逮捕されている加州新報の社内では、大野なみの縊死を記事にすることを危惧し、反対する者が多かった。しかし、賢治はこの記事が意味するものの大きさを測っていた。女性さえも逮捕し、縊死者も出るほど、FBIの尋問は厳しいということを知らせて、やがて逮捕を免れないであろう人々の覚悟を促したかったのだった。

「ケーン、やはり書いてしまったのね」

鉛筆を手にした井本椰子が、ブラウスの袖をたくし上げ、声をかけた。華奢な体だが、広い額と瞳が個性的であった。外国通信を日本文に翻訳するアルバイトとして一年前に採用され、今では投稿欄と冠婚葬祭の欄を任されていたが、いつも天羽賢治の書く記事に関心を寄せていた。

「これぐらいの記事にしないことには、この戦時下、苦労して邦字新聞を出している意味がないよ」

「解ってる、でも勇気があるすぎるって、時と場合には考へものだわ、活版のチーフの林さんもまだその記事のこと、心配してるわよ」

椰子は云うと、輪転機の傍を離れた。隣りが活版場で、インクの匂いと色がしみついた二百平方メートル程の広さに、活字がところ狭しと並び、ネクタイをきちんと締めた文選工や、ジョーンズ姿の植字工、組版工が十数名、働いて

いる。

背を屈め、組版を作っていたチーフの林が、胡麻塩の頭を上げた。賢治と眼が合うと、ちらつと視線を動かしたが、職人氣質のむつつきとした顔で、組版台に向った。賢治は林の傍に寄り、

「大野さんの記事は、心配しなくても、僕が責任を持ちますよ、それより松井社長は、日系人商業会議所会頭、各宗教団体会長諸氏らと一緒にFBI監獄に留置され、釈放の見込みは当分、なさそうです」

小声で云った。林の一徹そうな顔が動き、爪の中まで真っ黒になった指をインクで汚れた作業衣にこすりつけた。

「せいなら、新聞はこん先、いけんなつとな？」

林は、賢治の父と同郷の鹿兒島出身だった。

「解りませんね、しかし、松井社長は、FBIに連行される時、どんなことがあつても魔刊にならぬよう頑張つてくれと云つて行かれた、僕も頑張りますが、工場の方は、何といつても林さんです、よろしく頼みます」

日本軍のバールハーバー攻撃の日を境に、一夜にして敵性外国人となったロサンゼルス日本人にとって、邦字新聞は唯一の心の拠りどころであった。十二月八日、四名の記者と二十五名の印刷工、営業マンという小所帯ながら、全員顔を揃えて働いているところへ、FBIに踏み込まれ、その日から休刊を命じられるとともに、松井社長が連行された。その時、松井が、FBIに腕を取られながら、云つ

た言葉は、「新聞を頼む」という一言だった。幸い、軍当局の新聞休刊命令は、十二月八、九日の二日間だけで解除されたが、その後、検閲を受けながら発刊部数一万五千部の加州新報の刊行を続けて行くことは、容易ではなかった。むつつきと版を組んでいた林は、顔を上げ、

「松井社長がお居やらんごつなつた今、編集長はもう齡じやし、皆が頼りにすつとは天羽さん、おはんだけごわんど、よか記事を書いてたもんせ、そしたやあたい達も、氣張いもんで」

と云い、政府側から報道を命じられている『敵性外国人への注意』を16ポイントの大きな活字で組みはじめた。

戦時敵国人取締に関する大統領命令によって、日本人は短波ラジオ、送信器セット、銃器、兇器類を所持することは禁止すること、自動車のドライブには特に注意すること、夜間の外出は万止むを得ない場合を除き中止すること……

天羽賢治は、林の肩を叩き、社屋を出た。

賢治の足は、まっすぐリトル・トーキョーに向つた。父の天羽乙七の営む、ランドリー店まで徒歩で二十分ほどの距離である。